



## ブックレビュー Book Review

加藤 博己 (駒澤大学)

大山 正 (監修), 「元良勇次郎著作集」刊行委員会 (編: 大泉 溥主幹)

『元良勇次郎著作集』(全14巻 別巻2)

クレス出版

2013年4月~2017年12月刊行

本体8,000円~17,000円(税別)

参考: <http://www.kress-jp.com/pdf/901.pdf> (出版社パンフレット)

元良勇次郎 (もとら ゆうじろう) をご存じだろうか? 元良は1888年(明治21年)に(東京)帝国大学文科大学にて「精神物理学」を講じ、1893年(明治26年)に「心理学・倫理学・論理学第一講座」教授となった人物で、いわば、日本における初めての心理学者である。

元良は生来の勤勉さと博学ぶりを遺憾なく発揮し、実験心理学、生理学的心理学、教育心理学は言うに及ばず、人格心理、異常心理、精神療法、児童心理、青年心理、女性心理、家族心理、さらには、社会、政治、経済、民族、哲学、倫理、宗教と、極めて広範な分野にまたがる論稿を

残した。本著作集は、元良の没後 100 年を記念して、こういった元良自身の著作をわかりやすい現代語訳として復刻させたものである。その上、元良の友人・知人、弟子など、元良を知る者が元良の人となりや著作について述べた記事、エッセイ、解題などの二次資料をも収録した。これにより、本著作集は、元良像と彼の著作のみならず、日本への「心理学」導入期の詳細や、明治期の学問事情、社会情勢を知る意味でも、歴史的に価値ある出版物となった。たとえば、別巻 1 を読めば、元良が耕教学舎（後の青山学院大学）や正則予備校（後の正則高等学校）の創立に参画した経緯を見て取ることができるだろう。別巻 2 には、最近発見された「佐久間ノート」が CD-ROM にて収録されるという望外の付録が付いた。佐久間ノートとは、元良の弟子であった佐久間<sup>かなえ</sup>鼎（後の九州帝国大学初代心理学教授・主任、東洋大学長）が、元良の講義を受けた際にとった直筆ノートである。これは初代心理学者である元良の「心理学概論」の講義を知る上で、第一級の資料である。

ところで、元良は儒学者の父の元で幼少期を過ごし、10 歳の時に明治維新を体験した。そして、激変する社会情勢の中で、プロテスタント組合派（会衆派）にて洗礼を受けた（後に結婚を機に妻と同じメソジスト派に改宗）。その後、新島襄が創立した同志社英学校（現 同志社大学）1 期生となり、西洋の学問に触れる貴重な機会を得て、カーペンターの『精神物理学』を愛読して、科学としての心理学を志すことになった。それとは裏腹に、キリスト教への信仰心が薄れていった。そのような折、1894 年（明治 27 年）の暮れに、学問的興味から鎌倉の円覚寺にて、夏目漱石らと 10 日間の参禅体験を持ち、管長の釈 宗演の元で公案を通過した。この時の詳しい経緯を“参禅日誌”（本著作集第 6 巻収録）として公にしたところ、短期間での見性体験の表明に対して

物議をかました。しかし、元良自身は「私はとにかく悟ったのである」と公言し、師もこれを認めた（本著作集別巻1収録 内藤，1913）。このことをきっかけに、元良は禅を教育に応用することに強い関心を抱くようになり、複数の論稿を著し、1905年（明治38年）に第5回国際心理学会議（於：ローマ）で、「An essay on eastern philosophy: Idea of ego in eastern philosophy（東洋哲学に於ける自我の観念）」を発表した。ところが、民衆教化のために、はぐらかすような詭弁を弄する仏教から気持ちが離れ、実験や調査、実体験を通して得られる科学的な理解を目指すコント教（オーギュスト・コントの思想）、あるいは、実験教と元良自身が呼んだ科学的な立場を生涯貫いていくことになった。ちなみに、元良（1900）「日本現時学生の宗教心に関する調査の報告」（本著作集第9巻収録）は、学生の宗教心についての本邦初の大々的な調査研究であり、実に4,561通の質問紙を配布し、諸宗教や仏教各宗派についての意識調査を行い、内容を細かく分類し、表にして示したものである。

本学会の会員には、初代日本の心理学者である元良が行ったこのような諸宗教、仏教各宗派、禅に関する萌芽的な研究の存在を知って欲しい。恐らく最初で最後となるこの『元良勇次郎著作集』について、ご所属、ご出身の大学図書館や研究所、お住まいに近い図書館等での購入を促して頂き、一読頂ければ、翻刻者としてこれに勝る喜びはない。

